

地塩

No.422

2021. 3. 21

目次

発行日 2021. 3. 21
 創刊 1926. 9. 10
 編集 蕃山町教会執事会
 発行人
 印刷人 山陽印刷(株)
 発行所
 岡山市北区蕃山町2-15
 日本基督教団蕃山町教会
 TEL = (086)224-1322
 FAX = (086)224-1329
 三井住友銀行岡山支店
 口座 普通 0962358

礼拝説教

2021. 1. 10

「ぜいたくという不幸」

ヨハネの黙示録一八章一〜二四節

牧師服部

修

C. S. ルイスという作家が『悲しみをみつめて』という題の本を出版しています。これは、彼が晩年になって結婚したパートナーが亡くなった後のルイスの心情を描いている書物です。ルイスはこの書で、妻の死という悲しみから目をそらすことがないように、といくつもの自問自答を繰り返しながら綴ります。彼にとっては生涯の中で忘れえない三年間だけの結婚生活。それを、分かっていったこととは言え奪っていった死とその悲しみから、ルイスは逃げ出したくても逃げようとしません。それは、妻の死を見つめることの先にも希望があることを信仰によって分かっていたからです。だからこの書を閉じる直前で「体のよみがえり」への告白が表明されます。悲しみを見つめたからこそ到達することのできた「体のよみがえり」の信仰こそが、悲しみをみつめ続けることのできる力、悲しみをみつめたからこそ見出せる希望があることを示しているのです。「体のよみがえり」を信じる信仰がなければ、悲しみをみつめるといふ作業は辛い作業だし、できないことを思い知らされます。悲しみをみつめるといふ復活信

仰は離れがたく結びついていきます。復活の信仰に立つことよってのみ、悲しみを、悲惨を、苦しみ悶えながらも見つけることができるし、そこに本当の希望が見えてくる、ということをお考えされます。胸をえぐられるような悲しみを前にしたときに「体のよみがえり」を信じているか否かが決定的な違いをもたらすことを改めて思わされます。ルイスが死という悲しみをみつめていたように、ヨハネもまた辛くなるほどの災い、不幸を幻によって見ています。しかしヨハネは災いの幻を、もう見たくない、辛いから見せないでくれ、とは言わず、ひたすら見つめ、記します。その中で復活信仰の無い者たちの言葉がこのように記されます。三回にわたる「不幸だ。不幸だ」との叫びとして描かれます(九一〇節、一五〜一七節、一九節)。ここに悲しみが不幸にしかならない叫びが描かれますが、それは世の実態を表していると言えます。しかもここには彼らが世に迎合することによって享受してきたぜいたく、あるいは楽しみが消え失せる、という災いが示されており、それらを失ってしまったことへの悲しみ、不幸

の嘆きが描き出される。つまり復活信仰が無いゆえに、必ず失われるはずのものが事実失われたときに、必ず失われると分かっていたのに悲しみ、立ち直れない嘆きに身を落とします。ちなみに一九章一節以下では、同じように大バビロンが裁かれ倒れたときに、泣き悲しんだのではなく、ハレルヤと叫んだと描かれます。同じ出来事なのに、一方は不幸だと叫びもう一方はハレルヤと叫ぶ。この違いをもたらしているのが「体のよみがえり」の信仰、復活の信仰です。災いを見つめ、しかもその災いはある意味自分たちを苦しめている災いではあるけれど、それをしっかりと見つめることによって、不幸だと嘆くのではなく、私にはいつも希望が残されているのだ、ということを出す。災いを災いだけしか見られない者と、災いの先にあるものを見通せる者の違いと言えます。

この復活信仰に至らない原因は罪なのですが、特に一八章においては罪のあらわれの一つとしての「ぜいたく」というあり方が指摘されます。

今日の説教の題は「ぜいたくという不幸」なのですが、これは先の大戦において、国が戦意を高めるためのスローガンの「ぜいたくは敵だ」といったものに類似していますけれど、意味はもちろんです。戦時中のスローガンは、物資が窮乏している中であって、戦争に勝利するまでは我慢しろ、といった意味で用いられていますが、そもそも

このようなスローガンが掲げられている時点で戦いに勝利できるはずなどありません。

ともあれ、ヨハネの幻は神ではなく、ぜいたくを求めた者たちの不幸が描かれます。もちろんここまでがぜいたくではなく、ここからがぜいたくになるといった境界線を探すことを目的としているわけではありません。とは言え、一二〜三節には商人たちが扱っていた商品の一覧が示されています。この一覧において興味深いのは、最後のほうに「奴隷、人間」と記されている点にあります。商品の中に奴隷があるのは、当時の社会状況を考えれば十分な根拠があります。しかし、奴隷に引き続いて人間、と記されています。

この部分を原文で確認すると、「奴隷」という言葉も実際には「体」という単語です。ギリシャ語には「奴隷」という単語がありますが、それがここでは使われていません。そして「人間」は直訳すると「人の魂」と記されている。なので、最後の部分を直訳すると、「体、人間の魂」となり、意味が通じないので文脈から「奴隷、人間」と訳されますが、ぜいたくの商品の一覧として「体、人間の魂」と表現されるのは興味深い表現だと言えます。

この表現が何を意味しているのかを考えたとき、一つには、人間の体と魂が商品化される、ということ。言い換えれば、本来体も魂も神のものであるはずなのに、神に所有されること

を拒んだ結果、つまり罪の結果、人は

自らを商品化してしまったのです。そして自分が商品化されると、自分にはいったいどんな価値があるのだろうか、と自らに値札を付け始めることになる。そうして自分を査定し始めると、みずほらしい自分でしかないことに気付いてしまう。だから自分の商品価値を高めるために手に入れられるもの、使える物は何でも手に入れ、使いたいと思うようになる。でもそのぜいたくはいわば飾りであって本物ではない。どんなに若さを商品にしても人は老いるし、どんなに豪華で綺麗なドレスを着ても、裸になってしまえばその美しさは微塵もない。それゆえにぜいたくに飾り立てれば飾り立てるほど、人は空しくなるし、その空しさをごまかすためにまたぜいたくを求める。そういう悪循環に陥る。だからそのぜいたくに対する裁きが七節で「おごり高ぶって、ぜいたくに暮らしていたのと、同じだけの苦しみと悲しみを、彼女に与えよ」と言われるのです。ぜいたくが不幸なのは、ぜいたくという罪によって「わたしは主のもの」との愛を失って、自分で自分に値段を付けなければならなくなったことの不幸なのです。罪の私、汚れた私を見つめたくない。そのことが、「それでも、そういうあなたを愛している」という神さまの言葉に耳をふさぐ不幸となっているのです。

災いを見つめること、罪に汚れた私を見つめることは、気分の良いもので

はありません。けれども見つめ続ける

ところに、だからこそ救われなければならぬ私、そして救われた私の幸いを見出すことができます。災いを見つめ、苦しみを見つめ、罪の汚れを見つめ、「主よ、お赦しください」と祈る中に希望がもたらされると知らされるのです。そしてどれほど多くの不安が満ちていたとしても、復活信仰に立って不安と向き合い、不安を見つめるとき、復活の主、死に勝利された主が共におられるなら不安を恐れる必要はないのだということにも気付きます。それでも私たちは力強い者ではありませんから、災いの前でオドオドし、悲しみを見つめることから逃げ出し、無価値な私に世のぜいたくよって価値をつけようとあくせくしてくたびれ果て、自己嫌悪に陥ってしまうような者です。だからこそ私たちは、不安にさいなまれながらも無価値な私を見つめる。そうして見つめるところに「あなたはわたしの目に値高い」という救いの言葉を耳にし、主のものとされた喜びに立ちかえって生き始めることができます。そして世のぜいたくという不幸を捨て、体のよみがえりというもつとも価値ある恵み、どんなぜいたくにもまさる恵みが与えられて生きることが喜びとすることができるとは、喜ぶべきものではないのです。

見つめるべきものではないことは不幸の極みです。でも、その不幸に惑わされてしまふのが私たちです。だからこそ、災いを

見つめ、不幸を見つめ、不安を見つめ、そして罪を見つめ、そのゆえに落ち込むことがあったとしても、「だからあなたは救われ」、「だからあなたはわたしの愛する子」との主の言葉を聞きながら希望をもって生きたいのです。復活信仰が、私を商品化するぜいたくという不幸から離れて、感謝と慰めに満ちた歩みをもたらしからずからです。

そして、今この信仰に生かされていることを心から喜び感謝するとともに、今もなお自分を商品化して苦しみ、ぜいたくという不幸の中にある世に向かって、主を信じることにこそ救いと希望があることを高らかに告げ知らせてゆく教会でありたいのです。